

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 平倉 圭

本論文は、映画監督ゴダールの最初期から2008年にいたる作品群をほぼ網羅的に対象として、ゴダールが音および映像の編集ないしミキシングによって実現している思考の論理を明らかにしたものである。

全体は序と結論に挟まれた4章からなる。序における目標設定と方法論の提示を受け、第1章では、ジル・ドゥルーズのゴダール論を批判的に参照したうえで、作品の細部における音・映像の連結原理がきわめて緻密に検討され、ゴダールが「正しい」と呼ぶ結合が、音と映像の変動周期が示す時間的レイアウトの類似に基づいていることが見出される。しかしながら、著者が注目するのは、この結合が固定化したものではなく、同期と非同期の間を揺れ動く不確定性を特徴としているという点である。

第2章は、外在的な根拠をもたないという条件下で音・映像の諸要素を「正しく」結合しようとするゴダールの映画が、「問い」と「応答」をテーマとするにいたる経緯を明らかにする。ゴダールの映画において、この「応答」は不確定で擬似的なものにとどまる。だからこそ、初期には男による「拷問」としての「問い」と女たちの「非応答」が、1966年以降は「応答不可能」な女たちの「受苦」が重要なモチーフとなる。

第3章は、1968年以降にジガ・ヴェルトフ集団などでゴダールが手がけた政治映画を取り上げ、革命的な固有言語を創造しようとするその実践が、みずからの映画それ自体の孕む、一義的に確定できない「不定性」によって裏切られている点を指摘する。その矛盾は、1974年の『ヒア&ゼア・こことよそ』において、そこに記録されたパレスチナ解放闘争の兵士たちの身振りと声を、ゴダール自身が「見逃す／聴き逃す」という出来事となって顕在化する。のちの『映画史』で全面的に展開される「類似」による結合方法へと向かうゴダールの転回点が、これによって明確に位置づけられる。

第4章では、1970年代後半以降の作品でこうした「類似」による結合を実現する具体的手法として、「ディソルヴ」と「ダイアグラム」が数多くの実例を通して分析される。これらの手法に著者は、「似ていること」と「同じであること」を同一視する、錯乱的なゴダール映画の論理を認め、それを「形態的証明」と名づける。そして、この論理こそが、1990年代の作品群で特徴的な、類似した「分身」によって果たされる「復活」というモチーフに通じていることが明らかにされる。

このモチーフが有する射程を詳しく考察したのが第5章である。ゴダール作品に登場する受苦する女たちは、1980年の『パッション』以降、ヒステリーの症状に似たのけぞる身振りを繰り返す。そこにはヒステリーという病に結びつく、忘却された過去の想起＝復活という

主題が関係している、と著者はとらえる。そして、受苦・想起・復活をめぐるこうした問題系の中心には、ナチスの強制収容所で「回教徒」と呼ばれた生ける屍の身体を映画の中で「復活」させるという思考があった、と論じられる。さらに著者は映像の解像度を高める操作を通じ、そのような復活の実例として、『アワーミュージック』（2004年）において、ゴダール自身が自分の顔を強制収容所のユダヤ人や「回教徒」の映像に類似させているシーンをあらたに発見している。そして結論では、ゴダールが駆使するダイアグラムに特に注目し、本論文で浮き彫りにされた映画的思考の論理を、より広い展望のもとで探究する可能性が提示されている。

以上のように本論文は、徹底して内在的に構成される映像がどのように「正しい」結合を作り出すことが可能か、という問いの追究としてゴダールの映画をとらえ、その編集ないしミキシングの方法や作品中で反復されるモチーフの意味、およびそれら相互の関係性を、つねに映像の細部に即し、具体的な手続きによって詳細に明らかにしている。それは、先行するゴダール論を批判的に踏まえつつ、情報技術を活用して視聴覚情報の分析解像度を上げることにより、従来の研究とはもはや別次元で精緻な議論を展開している点で劃期的であり、明晰な文体や稠密な論理構成とも相俟って、きわめて高く評価できる内容を備えている。

審査の過程では、映像を分解して断片化する分析手法の妥当性が問われたが、映画のナラティブをあえて解体するこのアプローチは、ゴダール自身が『映画史』などで行なった、映画的時間の反省方法にのっとったものであり、限界を自覚した十分な吟味のもとに適用されていることが確認された。論文題目にある「編集」と「ミキシング」のうち、後期の作品で特徴的な「ミキシング」による結合が本論文では強調され、それと比較して「編集」に含まれる切断性が十分論じられていないという指摘も受けたが、ゴダール作品の膨大なアーカイヴを貫く「結合」の論理を説得的に提示し得たことは、その欠落を補ってあまりあると言わべきであろう。

もとより、映像の「類似」は、ゴダール作品のみならず、他の多くの映画に通底する現象であり、より大きなプロブレマティックに置き換えて分析することが可能である。しかしながら、本論文はまさしくこの巨大なプロブレマティックを扱う方法それ自体を厳密な手続きによって開拓したのであり、ゴダール論のみならず映画論一般を更新しうる先駆的な研究として、国際的に見ても多大な学術的貢献を果たすものと評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。